スポーツ心理学の歴史と松井三雄

The History of Sport Psychology and Professor Mitsuo Matsui

キーワード：国際スポーツ心理学会（ISSP）、体育心理学、東京女子体育大学
Keywords: International Society of Sport Psychology (ISSP), Psychology of Physical Education, Tokyo Women's College of Physical Education

阿江　美恵子
Ae Mieko

Abstract

In recent years, the sport psychology has developed internationally, and its academic history has been summarized in various ways. The psychology of physical education and sport psychology of Japan have a history of about 50 years. In Japan, the integration of the psychology of physical education and sport psychology is being considered. I proposed that by summarizing the history of sport psychology in the world and in Japan, it would be possible to consider the issues of sport psychology as well. The primary purpose of this study is to summarize the history of sport psychology.

On the other hand, Mitsuo Matsui, the founder of Japanese sport psychology, taught psychology at Tokyo Women's Vocational School of Physical Education in the 1940s. It is meaningful to summarize his works and show his involvement with Tokyo Women's College of Physical Education, as it is believed that our College has contributed a little to the history of sport psychology. The second purpose was to show the relationship between Mitsuo Matsui and Tokyo Women's College of Physical Education.

For the method, I used "APA Handbook of Sports and Exercise Psychology, Chap.1 A brief global history of sport psychology", the works of Mitsuo Matsui, "the history of the Faculty of Physical Education, Tokyo University of Education", and so on.

I have summarized the following three points as challenges for the next generation: the need to educate students in sport psychology about the history of sport psychology, the integration of the psychology of physical education and sport psychology, and the responsibility as one of the founding academic areas of physical education and sport sciences.

1．緒言

日本スポーツ心理学会は1973年に設立され、日本スポーツ心理学会第1回大会は1974年に早稲田大学体育局で開催され、2013年に40周年を迎えた（日本スポーツ心理学会、2013）。それからすでに7年たち、2020年で47周年を迎える。筆者は2019年のヨーロッパスポーツ心理学会50周年記念大会に参加し、ヨーロッパのスポーツ心理学会（FEPSAC）、関連して国際スポーツ心理学会（ISSP）の歴史を知ることとなった。

日本のスポーツ心理学は、大正13年（1924年）に設立されたわが国初の国立体育研究機関である体育研究所に技師として勤務した松井三雄を祖としている（藤田、2003、写真1）。体育研究所の最初の組織では、医学的調査研究、心理学的研究調査、団体遊戯及び競技の一部の研究調査、体操・教練・武道・水泳・競技の一部の研究調査などが行われた（茗体会百周年記念編集委員会、2015a）。現在の理論科目に照らし合わせてみると医学と心理学が必要と考えられたことがわかる。松井は東京帝国大学の心理学科を卒業しており、スポーツに関連する心理学研究を行うことになった。

上記の松井三雄は、1949年に設立された東京教育大学体育学部体育学科でも体育心理学の教授を務めたが（茗体会百周年記念編集委員会、2015b）、1959年に「スポーツ心理学」という著書を著している（松井、1959）。そして1944年（昭和19年）東京女子体育専門学校設立認可申請文書に国語、心理の兼任として名前がある（藤村学園創立百周年記念誌記録等作成実行委員会編,2002）。

その後、1973年に松田岩男を理事長として「日本スポーツ心理学会」が設立され、2020年で47周年を迎える。

日本体育学会の体育心理専門領域と日本スポーツ心理学会の統合問題が4年をかけて議論されたが、体育心理学とスポーツ心理学は別のものではないというのが筆者の認識である。世界レベルでは「体育」は教育の中で発展して、「スポーツ」は楽しさや高い身体能力の発揮を目指すスポーツ競技として大きく発展してきている。日本では「体育」でスポーツ種目を扱い、それが課外活動の「運動部」で競技スポーツとして発展してきている。これは世界の中では特異な発展の仕方だと言ってよいだろう。

顧みれば時がたち、50年にわたる研究の蓄積は、まとめながら変遷を理解し次の時代への発展を模索する時期に来ているように思われる。その時に、「体育」「スポーツ」を改めて明確に認識する必要があるだろう。

本研究では、日本の体育・スポーツ心理学の祖であった松井三雄と東京女子体育大学の関係を示すことを第一の目的とした。次に、アメリカ心理学会から出版された「APA handbook of Sport and Exercise Psychology(2019)」の世界のスポーツ心理学の歴史と日本のスポーツ心理学の歴史を比較してまとめることを第二の目的とした。

2．方法

以下の資料を用いた。

① APA handbook of Sport and Exercise Psychology (2019)
② 日本スポーツ心理学会40年記念誌（2013）
③ 東京教育大学体育学部の歩み（2015）、
④ 50 years of FEPSAC Recent developments in European Sport Psychology (2019)
⑤ 藤村学園創立百周年記念誌記録等作成実行委員会編（2002）藤村学園100年のあゆみ、学校法人藤村学園
⑥ 松井三雄の著書（1930、1952、1959、1962）

これらの資料から、二つの目的を明らかにした。

3．松井三雄の業績と東京女子体育大学

まず、第一の目的である体育・スポーツ心理学の祖松井三雄の略歴と本学の関わりを以下に示す。略歴は藤田（2006）を参考にした。

松井は1897年（明治30年）に山口県に生まれた。東京帝国大学文学部心理学科を1923年（大正12年）3月に卒業後、同年4月に同大学航空研究所嘱

託、1924年（大正13年）8月同大学文学部嘱託を経て、同年11月に文部省体育研究所の技手となった。1925年（大正14年）12月から心理学研究のため文部省からドイツに1年半留学を命ぜられ、ドイツ体育大学やそのほかの研究機関を訪れて資料収集を行った。そして帰国の翌年1928年（昭和3年）に体育研究所の技師となった。体育研究所は1941年（昭和16年）3月に廃止、4月より厚生省研究所に勤務した。

その間に、東京文理科大学講師、東京女子体操音楽学校講師、東京女子体育専門学校講師を務めた。1947年（昭和22年）体育研究所から東京高等体育学校を経て変わった東京体育専門学校の教授となり、同学校が1949年（昭和24年）に新制東京教育大学に包摂されるとそこの教授になり、1950年（昭和25年）には東京教育大学体育学部教授になった。1954年（昭和29年）には東京大学教授になり、教育学部、大学院人文科学研究科体育専門課程を担当し、1958年（昭和33年）定年退職。1958年（昭和33年）4月より日本大学文理学部教授となり、1967年（昭和42年）定年退職し、1968年（昭和43年）鶴川女子短期大学学長になった。

1967年（昭和42年4月）から1971年（昭和46年）3月まで日本体育学会会長、1966年（昭和41年）1月から1972年（昭和47年）1月まで日本学術会議7・8期会員を歴任した。1974年には前年に設立された日本スポーツ心理学会の顧問に就任している。1983年（昭和58年）85歳で逝去した。

写真1．松井三雄（藤田、2006）

1944年（昭和19年）3月私立東京女子体育専門学校設立認可申請文書に国語、心理の兼任として名前がある（東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2002）。1950年（昭和25年）3月14日東京女子体育短期大学設置認可文書（東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2002）にも、体育心理学、心理学の兼任教員として名前がある。

しかし、1962年（昭和37年）4月の東京女子体育大学設置では、松井三雄の名前はない。体育心理学の本学での専任は1970年（昭和45年）の鈴木清を待つことになる。1950年から1968年までに、松井の身辺は東京教育大学から東京大学、さらに日本大学に移動しているので、この間非常勤を続けた可能性はあるが、退任日がはっきりしていないので、不明である。

筆者は日本スポーツ心理学会設立以降に松井に会っているが、本学に勤務することになろうとは思ってもいなかったので、直接話をしたことはなかった。すでに職は退いていたせいか、発表研究に質問していた記憶はない。

松井は同時代の体育・スポーツ心理学の第一人者であった。しかし本学では非常勤であり、資料も見たらないためその足跡を大学の組織や研究に見ることはできなかった。

本学図書館には松井の寄贈した10冊以上の著書（重複あり）が収蔵されている。このことが松井三雄が本学にかかわった証であり、手書きの線の引かれた本は感慨深い。

4．日本スポーツ心理学会設立以前（～1972）

松井の著書に「體育心理学」（1930、昭和5年、写真2）がある。肩書は體育研究所技師　文學士　松井三雄であり、ハードカバーに「Psychology of Physical Education by M. Matsui」との型押し文字が入っている。日本初の体育心理学の本と考えられる。その序に参考書として、C.R. GriffithのPsychology of coaching(1926)とPsychology and Athletics (1928)があげられている（写真3）。昭和初期にも関わらず、アメリカ合衆国の本を手に入れていたようだ。松井

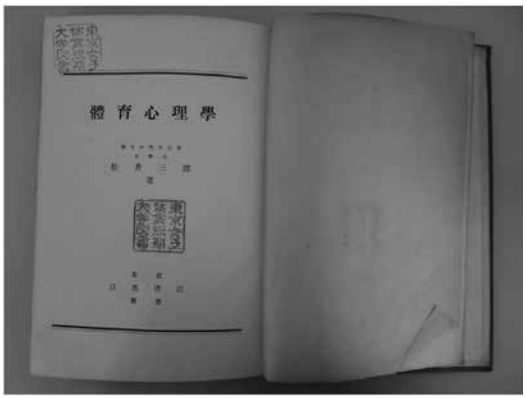

写真2．體育心理學内表紙（松井、1930）

は体育と心理学を明確に分けて考えており、体育の心理学的研究を体育心理学と名づけている。そして、体育は教育の精神を忘れてはならないことを強調している。

しかし、松井も触れているように教育学の知、徳、体育の三育主義は現在まで残っているが、1900年代には教育学から体育の文字が消えたことが明らかとなっている（中野、2016）。体育研究所もその流れを汲み、東京高等体育学校となり、東京女子体育大学の前身である東京女子体育専門学校でも、教育学から離れた教育課程がつくられた。第二次世界大戦後の新制大学制定で東京教育大学に体育学部ができて、教育学部とは別の学問体系ができたと言ってよいだろう。

とはいえ、地方の国立大学は教育学部、東京教育大学では体育学部で、体育教員養成を行ってきた。現在に至るまで体育・スポーツは、教育と密接な関係を保っていると言ってよいだろう。

第二次世界大戦後、日本を占領したアメリカ合衆国から多くのスポーツの影響を受けた。松井はドイツのカール・ディーム（C. Diem、1936年ベルリンオリンピック大会組織委員会事務総長、のちにケルン体育大学学長）の言を引用して、「スポーツの本質は闘争である」と考え、「身体的最高能力を発揮するに必要な条件を心理学的に研究するのが、スポーツ心理学である」と考えた（松井、1959）。1957年には「スポーツ心理研究会の名のもとに度々会合を持ち、各自の研究成果を発表したり、外国の文献を読

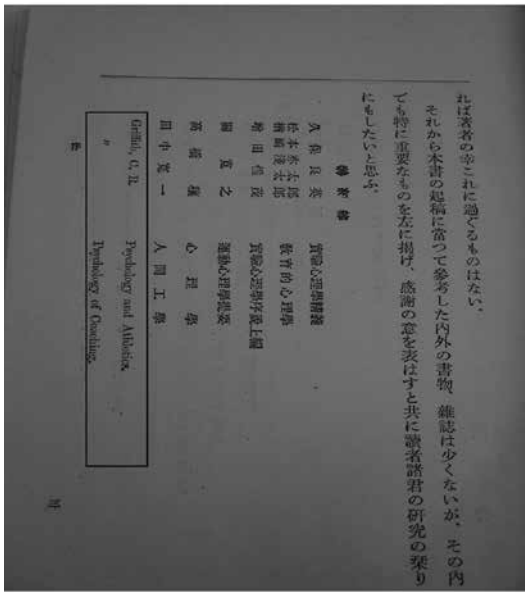

写真3．體育心理學「序」のGriffithの著書名（松井、1930）

んだりして討議を重ねてきた」という（松井、1959）。

松井が1954年（昭和29年）東京教育大学から東京大学に移動したのち、東京教育大学の体育心理学研究室は鈴木清が教授、松田岩男が助教授であった。鈴木清はのちに東京女子体育大学学長（在職1970～1981）になり、松田岩男は長く本学の非常勤講師を務めている（藤村学園創立百周年記念誌記録等作成実行委員会編、2002）。体育・スポーツ心理学の研究はしばらく松井の東大系と鈴木清・松田岩男の東京教育大系に分かれ、東京大学ではその後、体育心理学を教授する教員は近年になるまでいなかったため、松井の弟子が定年になった後は、体育心理学の研究は行われなくなった。

その後の1964年東京オリンピック開催の決定により、松井（1959）は「スポーツにおいて成功する条件」として、発動力（今の動機づけ）、適性（生得的・後天的の両方）、トレーニング（量、内容）、テクニック（技術、フォーム）、策戦、適応（緊張コントロール）の6つをあげ、その中で適性とトーニング（全体の素質的傾向とその組織的発展）が主役であると考えた。諸要因を研究することがスポーツ心理学の任務と考えたのは、オリンピックで好成績を上げるためのスポーツ心理学の重要性を意識したからではないかと

推測される。1959年刊行の「スポーツ心理学」（松井編集、1959、写真4）が日本で初めてのスポーツ心理学を題名とした本だと思われる。執筆者は松井三雄、鷹野健次、稲垣安二、土井英彦、柏原健三、藤田厚、太田哲男（のちに太田鐵男と表記）、松本功介であった。

写真4．スポーツ心理学（松井編、1959）の内表紙
印は学校法人藤村学園（東京女子体育大学）の印

1964年の東京オリンピック夏季大会は「スポーツ心理学」発展の起爆剤になったと言える。つまり、学校体育で教育だけ考えていればよかった体育心理学が、競技スポーツで成功するための「スポーツの心理」を研究する必要に迫られたと思われるからである。

5．スポーツ心理学の文献にみる歴史への関心

Kornspan,A.S.＆A.Quartioli（2019）のまとめたスポーツ心理学の国際的歴史をもとに、スポーツ心理学の歴史への関心を以下に紹介する（訳は筆者）。

スポーツ心理学史の議論は1970年代の様々なスポーツ心理学の教科書に表れ始めたが、その範囲はかなり短かった。スポーツ心理学史の知識の基盤は、1970年代後半から1980年代前半に発展し始めた。K.Feigeの1977年著の「The Development of Sport Psychology: A Synopsis of Its Research, Application and Organization in Different Countries（スポーツ心理学の発展：様々な国の研究、応用、組織の大要）」は、スポーツ心理学がどのように世界中で発展したかを表す最初の研究であった。そのすぐ後に、J.H.Salmela(1981)が「World Sport Psychology Sourcebook（世界スポーツ心理学資料集）」を出版し、世界中の多くの国のスポーツ心理学の歴史的側面と現状をまとめた。

近年の数10年間に、世界や各国のスポーツ心理学史をまとめることへ関心が高まった。ドイツ、メキシコ、スペイン、ブラジルでは、スポーツ心理学史を概観する多くの学術論文が生み出された。歴史を重ねることの意義が認められたと言える。

6．世界のスポーツ心理学の歴史レビュー（Kornspan,A.S.＆A.Quartioli、2019）

1890−1919

スポーツ心理学の最初の発展は1800年代終わりと1900年代初めのあいだで全世界的に始まったという点で一致しているが、だれが最初の人物であるかは明らかではなかった。

特別なスポーツ心理学研究室は1890年代には存在しなかったが、イエール心理学研究室のE.W. Scriptureほかは競技者に関する様々な研究を行った。Scriptureはスポーツ心理学の領域を発展させることに関心はなかったが、体育の領域の中で心理学がどれほど応用できるかを教育者たちが理解する手助けができると考えた。

Scriptureの最初の研究ののち数年たって、Norman Triplettはサイクリスト（自転車愛好家）の社会的促進の研究を行った。Triplettの研究は最初のスポーツ心理学の研究と考えられた。

この初期の時代にスポーツ心理学の発展に影響を与えたのはPierre de Coubertinであった。近代オリンピック大会の始祖であるCoubertinはスポーツ心理学の最初の会議を開催した。1913年にスポーツの心理学と生理学の国際会議をスイスのローザンヌで開催し、スポーツ心理学会議と名付けた。これはスポーツ心理学に焦点を当てた最初の国際会議と考えられている。

Scripture, Coubertin, Triplettの研究は初期の

歴史として重要なものだったが、Wilhelm Benary、Francis Guimareans、Karl Lashley and John Watson、Philip Tissiéも無視できない。

1920−1940

1920年から1940年の間には、スポーツ心理学実験室が発展した(Kornspan, 2012)。1920年最初のスポーツ心理学研究室はドイツとロシアであった。Petr Antonovic Rudikの指示のもと、実験心理学研究室がモスクワの身体文化専門学校で始められ、ほぼ同時にRobert Werner Schulteがベルリンのドイツ身体エクササイズ高等学校でスポーツ心理学研究室を始めた。そのすぐのちの1924年に、松井三雄（傍線筆者）が日本で国立体育研究所の心理学部門の技師（非常勤職員）として雇用された。その1年後1925年にColeman R. Griffithがイリノイ大学でスポーツ心理学研究室の主任になっている(Gould & Pick, 1995)。

Griffithのイリノイ大学と野球チーム・シカゴカブスとの研究は、スポーツ心理学に関心を持つ研究者たちに注目された。Griffithたちは、どのように運動スキルが教えられて学習されるのか、様々な心理変数がどのようにスポーツパフォーマンスに影響するのか、アスリートが持つ心理学的な傾向は何か、という研究を行った。

Walter & Milesは、スタンフォード大学のフットボールコーチPop Warnerへの介入で、Milesはだれが成功するフットボール選手になるか決定するためにアスリートの反応時間を測定した。

近年、1920年から1940年のスポーツ心理学の世界的な発展についての多くの情報が出版されている。1920年にモスクワ身体文化専門学校の責任者だったVarnava Efimovich Ignatievは、4研究室からなる科学学部を発展させた。そのうちの一つが心理学に焦点を置き、Petr Antonovic Rudikが指揮を執った。Rudikの研究は体育で模倣と教示を使うものや、身体活動と反応時間の研究などであった。また、Rudikらはボクサーとチェスプレイヤーの心理的傾向を測定した。1930年代には、モスクワ身体文化専門学校に心理学学部が設立された。ここでRudikらは、アスリートのパーソナリイティ、スポーツスキル指導の心理学的側面、スポーツスキルの一般的な心理学的要素、を研究した。彼らはスポーツスキルに適用できる運動学習も研究した(Rodionov & Valyuzhenich, 2012)。

1920年から1940年のドイツでは、世界で最初のスポーツ心理学研究室の所長であったRobert Werner Schulteの研究が注目された。彼は主にスポーツパフォーマンスに関連するスキルや能力を評価するために、心理学的手法を使用した(Bäumler、2009)。さらに、心理運動スキルがどのように学習され、発揮されるのかを分析するために、体育専門学生にスポーツ心理学の講義を行った。彼はBody and Mind in Sport（スポーツでの身体と心）やAptitude and Performance Testing in Sport（スポーツにおける適性とパフォーマンスの測定）などのスポーツ心理学の本も著した。

ドイツ、ロシア、日本、アメリカ合衆国以外にも、世界中でスポーツ心理学に関心が向けられた。Kornspan (2012)によれば、スポーツ医学の国際連盟―1928年設立―は、その目的の一つをスポーツに関連する心理学の研究だと考えた。さらに、Coubertinはスポーツ教育の国際部局を開設し、心理学者に加わるように勧め、スポーツ科学の理解のために心理学の発展が必要だと考えた。

この時期に数名のスポーツ心理学者が、大学、プロスポーツやコーチたちのコンサルタントに任命された（Kornspan,2012)。この時代のコンサルタントの最も有名な例は、シカゴブルズ野球チームに介入したColeman R.Griffithとと Jack Sterretであった。Griffithのコンサルテーションサービスは成功し、心理学者がプロスポーツチームと帯同してサポートすることの重要性が明らかとなった。

1941−1965

サンホセ州立カレッジの心理学教授であったYatesは、1940年代の初めにサンホセ州立大のボクシングチームに心理的介入を行い、Tracyは1950年の野球シーズンにセントルイスブラウンズ野球チームのコンサルタントに任命された。さらに、スポーツ

パフォーマンスの向上を助けるために、催眠法が世界中に広まった。この時期に北アメリカではスポーツ心理学を実践する研究者がふえてきた（Burt Giges, Bruce Ogilvie, Thomas Tutkoなど）。その上、John Lawther, Franklin Henry, Anna Espanchadeなどが、コーチと競技者の競技パフォーマンス改善に心理学を役立てようとした。

1941年から1965年の間に、João CarvalhesとAthayde Riberio da Silva、同じく、Espito Santo & Jacó-Vilelaは、Riberio da Silvaがチームと行った応用的なスポーツ心理学が報告されている。

ロシアでも応用スポーツ心理学が発展している。日本でも知られているAvksenty Tcezarevich Puniの競技者のためのメンタル準備のモデルは、ロシアの競技者のパフォーマンスを高めるために初めて用いられた。その結果、1950年代に競技者の心理的準備はロシアの代表選手のトレーニングプログラムの一部となった。アメリカ合衆国、ロシア、ブラジルに加えて、日本（松井、1959）、イタリア、英国、オーストラリア、ドイツでも心理学をスポーツパフォーマンスに応用し始めた。

さらに、世界中の大学でスポーツ心理学科目や研究室が発展し始めた。アメリカ合衆国ではColeman Griffithがイリノイ大学の学長になり、大学の発展のためにスポーツ心理学の専門学位プログラムを作り、スポーツ心理学を学生にアピールした（Vealey, 2006）。

このようなスポーツ心理学の発展の拡大はアメリカ合衆国だけで起こったのではなかった。A.T.Puniのスポーツ心理学研究室は1946年にロシアのレスガフト大学で始まった（Ryba & Stambulova, 2016）。

この時期にアメリカでは国内のスポーツ心理学会議の開催、さらに2つの国際スポーツ心理学の大会も開催され、この二つはスポーツ教育学の国際部局によって組織されたものであった。最初の心理学の大会は1944年のスポーツ教育学会議の間に行われ、これがスポーツの心理学への最初の関心と考えられている（Kunath, 2003）。

この時代の終わりに、スポーツ心理学分野は新しい発展段階に移った（Kunath, 2003）。ロシアではスポーツ心理学委員会が1947年に設立され、1953年にチェコスロバキアで、Miroslav Vanekがチェコスロバキア体育スポーツ連盟の一部としてスポーツ心理学委員会を設立し、Vanekは1960年にチェコスロバキア心理学協会のスポーツ心理学部門も設立した（Salmela, 1992）。同じような動きはブルガリアでも見られ、1962年にブルガリアスポーツ心理学委員会が生まれ、スポーツ心理学の概念をコーチと競技者に紹介することに焦点をあてた。同時に、領域を組織する力は日本にも広がった；1960年に日本体育学会の体育心理学専門分科会が生まれた。

Ernest Jokl は、スポーツ心理学領域に関わっている研究者を見つけ出し、専門家組織を作るために、スポーツと体育の国際会議の研究委員会を率いた(Kunath, 2003)。

1966−1980

この10年余にスポーツ心理学は科学的な研究を行い、国内と国際学会で研究結果を発表し、ピアレビューされた研究雑誌を発刊することに学問的な焦点を置いた。この時期にスポーツ心理学の大学院教育の発展にも大きな関心が向けられた(Gould & Voelker, 2014)。

Ferruccio Antonelliは1960年代初期に、スペインで行われたスポーツ医学の会議に出席して、スペインのJosé María CagigalとJosé Ferrer-Hombravella、フランスのMichel Bouetと国際的なスポーツ心理学の会議の必要性を話し合い、イタリアで会議を開催することを決めた。そして世界中のスポーツ医学組織と協力してスポーツ心理学領域で働く研究者を500名以上探し出し、会議に参加するように誘った。最初の世界スポーツ心理学会議は1965年の4月に開催され、450名が参加した。第2回、第3回、第4回の国際スポーツ心理学会(ISSP)は1968年ワシントンDC；1973年マドリッド、スペイン；1977年プラハ、チェコスロバキアでそれぞれ開催された（Morris, Hackfort, & Lidor, 2003）。

そして、1960年代後半に英国スポーツ心理学会、カナダ心理運動学習とスポーツ心理学会、ヨーロッパスポーツ心理学会、ドイツスポーツ心理学協会、

北アメリカスポーツと身体活動の心理学会、スイススポーツ心理学作業グループが設立された。

1970年代には、オーストリアスポーツ心理学作業グループ、ブラジルスポーツ、身体活動、レクリエーション心理学会、エジプトスポーツ心理学協会、フランススポーツ心理学会、フィンランドスポーツ心理学会、ポルトガルスポーツ心理学会、スウェーデン行動スポーツ科学協会、日本スポーツ心理学会が設立された。

新しい研究を出版するための国際スポーツ心理学ジャーナルの一つがInternational Journal of Sport Psychologyで、1970年にFerruccio Antonelliによって発刊された。他のスポーツ心理学のジャーナルは1970年代に出版された。それはJournal of Sport Psychology (United States)、Journal of Behavior (United States)、Japanese Journal of Sport Psychologyなどであった。

スポーツ心理学の科学が多くの国で発展するにつれ、心理学をスポーツに応用することへの関心が成長し続け、アメリカ合衆国ではBruce Ogilvie、Thomas Tutko、John Lawtherらが、コーチや競技者がスポーツ心理学をどのように用いることができるかを教えるリーダーとなった。1960年代終わりに、American Alliance for Health, Physical Education, Recreation, and dance（AAHPERD; 現在はthe Society of Health and Physical Educators）が第2回ISSP世界スポーツ心理学会の開催を援助したのち、スポーツ心理学の特別委員会を作る決定を行い、スポーツへの心理学の実践的応用の促進を目標とした。

アメリカ合衆国では1970年代に多くの人がスポーツ心理学の実践を開始した（Simon & Anderson, 1995）。オリンピック競技者とコーチへのスポーツ心理学プログラムを発展させる目的でスポーツ心理学委員会がつくられたのであった。Salmela(1981)は世界中のスポーツ心理学の専門家が自らの時間の20％以上をスポーツ心理的コンサルテーション（相談）に費やすことを示した。

1981－2000

1981年から2000年の間に、スポーツ心理学は世界的に大きく成長した。スポーツ心理学の重要性の増加は、世界中でチームにスポーツ心理学のサービスを仕事にする人を増やし、競技者やコーチをスポーツの精神的な側面から助けるスポーツ組織を作り出した。アメリカ合衆国オリンピック委員会はスポーツ心理学分野を3つのカテゴリーに分けた：教育的スポーツ心理学、臨床スポーツ心理学、スポーツ心理学研究である(Kornspan, 2012)。

こうして、1980年代に、専門的な実践に焦点を置いたスポーツ心理学組織がつくられた。The Association for the Advancement of Applied Sport PsychologyとDivision 47 of the American Psychological Association (APA) である。これらの組織が主張したのは、スポーツ心理学の専門家としての資格やライセンスであり、心理相談に必要な訓練をスポーツ心理学に応用するということであった（Kornspan, 2009）。

また、1980年代から1990年代に世界中で、各国のスポーツ心理学学会の発展と科学的研究雑誌の発展が続いた。中国スポーツ心理学会、オランダスポーツ心理学会、メキシコスポーツ心理学会、スペインスポーツと身体活動の心理学連盟、インドスポーツ心理学協会、ナイジェリアスポーツ心理学協会である（Salmela, 1992）。

1965年から1980年までには、スポーツ心理学の研究雑誌は少ししかなかった；1980年から2000年にはスポーツ心理学の雑誌は2倍以上になった。スポーツ心理学が応用的な実践に焦点を置くことが増え始めると、Journal of Applied Sport PsychologyとThe Sport Psychologistなどの雑誌は応用スポーツ心理学に焦点を置くように発展した。同様に、英語以外の言語による科学雑誌の発刊も増え始めた（例、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、韓国語）。

2001－現在

この20年間にスポーツ心理学は大きな発展をした。それは独自にピュアレビューする研究雑誌の存在である。1999年には11冊のスポーツ心理学の雑誌が

あった；この20年間にスポーツ心理学―研究雑誌の数は26冊に増加している。26冊の雑誌は英語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語など様々な言語で発行されている。文献の出版レビューだけのスポーツ心理学の雑誌もある：International Review of Sport and Exercise Psychology。

新しいスポーツ心理学の雑誌は細分化している。Journal of Clinical Sport Psychologyは2007年に発刊され、競技者のメンタルヘルスと臨床問題に焦点を置いている。2010年もAPA（アメリカ心理学会）のDivision47（47部局、現在はスポーツ、エクササイズ、パフォーマンス心理学会となっている）は、Sport, Exercise, and Performance Psychology誌を始めた。Division47の雑誌は、スポーツ心理学の概念を競技者との仕事だけでなく、エクササイズや一般的なパフォーマンス環境のより広い領域に応用している多くのスポーツ心理学専門家の関心も示している。スポーツ心理学の介入だけに特化した雑誌、Journal of Imagery Research in Sport and Physical Activityも誕生している。

アメリカ合衆国の研究雑誌の増加はスポーツ心理学の領域の広がりと細分化を示している。

7. 日本のスポーツ心理学の歴史

2020年現在、日本スポーツ心理学会は47周年を迎えるが、スポーツ心理学事典（日本スポーツ心理学会編、2008）の総論に「スポーツ心理学の歴史」がまとめられている。

そこでは、19世紀末のドイツの実験心理学のブントとそこに留学した東京高等師範学校教授松本亦太郎（帰国後、京都帝国大学の精神動作学研究室開設）をスポーツ心理学の萌芽としている。本稿で取り上げた松井三雄は松本亦太郎の門下生の一人であった。Kornspan,A.S.＆A.Quartioli（2019）が心理学者を取り上げていないので、ブント、松本をスポーツ心理学の祖とすることは難しいと思われる。したがって、本稿でも、体育研究所の心理学部門の研究者として職を得た松井三雄を体育・スポーツ心理学の祖として扱うこととした。

1924年以降の体育・スポーツ心理学にかかわる出来事を年表として以下にまとめる。

1924年　体育研究所技師　松井三雄（東大　心理学科卒）は心理学的研究調査を担当した。日本の体育・スポーツ心理学の祖と考えられる。

1949年　東京教育大学体育学部が設立される。体育心理学担当は松井三雄であった。

1950年　日本体育学会が設立される。松井三雄（東京教育大学体育学部）は理事として参画している。

1961年　日本体育学会に最初の3専門分科会、運動生理学、体育心理学、キネシオロジーが設置された。続いて体育史、体育社会学専門分科会が承認された。

1965年　第1回国際スポーツ心理学会（ローマ）に松田岩男と太田哲男（のちに太田鐵男と表記）が日本のスポーツ心理学関係者として登録され、会議に参加した（松田、1974）。これは、第二次世界大戦後の1964年に東京でオリンピック大会が開催され世界的に認知されたことや米ソの東西冷戦によって競技力向上のためのスポーツ心理学への関心が高まったことも関係しているだろう。

1973年　日本スポーツ心理学会が設立され、1974年より、松田岩男（東京教育大学体育学部体育心理学教授）が理事長になる。

～1988年

1989年　日本スポーツ心理学会は会長制に移行した。初代会長は松田岩男、初代理事長藤田厚である。
以後、藤田厚、徳永幹夫、杉原隆、猪俣公宏、石井源信、中込四郎、荒木雅信の8名が会長となり、2019年山本裕二（名古屋大学）が第9代会長となり現在に至っている。

2000年　メンタルトレーニング指導士資格を制定し、学会員の数が急増した（400名規模から700名以上へ、2020年現在で800名を超えている）。

詳細については2013年に作成された「日本スポーツ心理学会40年記念誌」（日本スポーツ心理学会、2013）を参照してほしい。

8. ISSP（国際スポーツ心理学会）会議の歴史

ISSP(国際スポーツ心理学会、以下ISSPと略す)会議については、1965年に第一回会議がローマで開催され、1968年第2回（ワシントンDC）、1973年第3回（マドリード、スペイン）、1977年第4回（プラハ、チェコスロバキア）でそれぞれ開催された（Morris, Hackfort, & Lidor, 2003）。さらに1981年第5回（オタワ、カナダ）、1985年第6回（コペンハーゲン、デンマーク）で開催された（藤田、2003）。

筆者は1989年第7回大会（シンガポール）に初参加し、1993年（リスボン、ポルトガル）で開催された第8回ISSP会議にも参加した。この時藤田厚（日大）がISSP副会長で、その後会長の死去により1994年より会長となった（藤田、2003）。

1997年第8回（テルアビブ、イスラエル）開催（筆者は不参加）。2000年代に入り、2001年第10回会議（スキアトス、ギリシア）、2005年第11回会議（シドニー、オーストラリア）、2009年第12回会議（マラケシュ、モロッコ）、2017年第14回会議（セビリア、スペイン）にも筆者は参加した。2013年第13回（北京、中国）には筆者は不参加であった。2001年のギリシアでメンタルトレーニング資格への関心が高くなったことを実感した。

会議は、スポーツ心理学の世界的な広がりを意識して、様々な国で開催されている。日本も2013年の開催を目指して2009年の会議で立候補したが決定できなかった。研究者の集まりではあるが、国際会議は国際情勢に影響されることが明らである。第15回は2021年に開催される（タイペイ、台湾）。アジア地域のスポーツ心理学も広がっており、日本スポーツ心理学会の国際的視点も重要となるであろう。

9. ヨーロッパスポーツ心理学会(FEPSAC)の歴史

2019年7月15-23日にドイツのミュンスター大学でFEPSACの50周年記念会議が開催された(Elbe,Anne-Marie　&R.Seiler)。1968年に第1回会議がブルガリアのベルナ（Varuna）で開催され、10か国70名の参加者だった。初代会長はブルガリアのエマ=ゲロンであり、2015-2019の会長はドイツのAnne-Marie Elbeであった。女性会長はこの二人だけであるが、1983-1999までは23名のうち4名のキーノートレクチャーしか女性がいなかった（1995年と1999年ではゼロ）。しかし、2003年から2015年の間に大きな変化があり、11名女性で12名が男性というバランスになった（50周年記念誌、2019）。

EUROの設立もあり、ヨーロッパ各国が一つになって研究者が移動したり、心理サポートを行っている。同様の国際的な地域でのスポーツ心理学会として日本も参加しているASPASP（アジア南太平洋スポーツ心理学会）がある。この組織は藤田が1989年に組織し初代会長となった（藤田、2003）。しかし、近年、日本の研究者たちの参加が少ない。

10. スポーツ心理学の歴史を振り返って

1980年代のアメリカのE.W.　ScriptureやNorman Triplettのスポーツ競技で心理的側面を扱った研究が、最初のスポーツ心理学への関心と考えられている（Bäumler, G. , 2009).

1920年代になるとドイツ、ロシアでスポーツ心理学実験室ができ、アメリカではチームへの心理的介入が行われた。少し遅れて日本でも「体育心理学」の研究が始まった。ISSPで副会長を務めた藤田厚からの情報発信により、松井三雄の体育心理学の研究が世界に紹介された意義は大きい。その松井が本学とかかわりがあったこと、さらにその後、鈴木清、松田岩男も本学とかかわりがあったことは、同じスポーツ心理学の研究者として大変うれしいことである。

その後、世界は第二次世界大戦に突入し、敗戦

国となった日本は、新制大学がつくられるという大きな変革が起こり、昭和25年（1950年）に、やっと体育研究者の組織化がなされた（日本体育学会の設立）。1961年になり最初の専門分科会が3つ設置され、体育心理学はその一つであった。

1965年に国際スポーツ心理学会が設立され、第1回会議に日本から松田岩男、太田哲男が参加している。このことは、日本体育学会の体育心理学専門分科会が1961年に設置され、国内の組織化が十分であったことを示すものであろう。

日本は体育心理学としてスタートしたが、世界はスポーツ心理学として進み、それに連動して日本でも日本スポーツ心理学会が設立された。

11．これからの日本のスポーツ心理学

松田（1974）は、日本スポーツ心理学会設立当時、「スポーツ心理学の研究が進んできた現在、以上のような（スポーツに関する心理学的研究は体育心理学の一つの分野としてとらえられる。そして、体育心理学は教育心理学の体育への適用あるいはその応用であるとされるというような）考え方は妥当性を欠くように思われる。むしろ、心理学の立場から言えば、スポーツ心理学は、教育心理学と並ぶような応用心理学の一つの領域であり、スポーツ心理学の教育への適用が体育心理学であると考えるべきではないであろうか。」と体育心理学とスポーツ心理学の関係を整理している（前の段落を省略したのでカッコ内に筆者加筆）。同時に、「スポーツとは何か」を明らかにされるべきものとしている。

日本体育学会体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会の統合は、松田の言に従えば、体育心理学はスポーツ心理学の教育への適用であるから、日本スポーツ心理学会に統合されるべきだと思われる。

他方、欧米の「体育」を冠さないスポーツ心理学の定義は頭に入れておく必要があるだろう。Anshel. M.H.　(2019)はその著書の前書きで、スポーツ心理学とエクササイズ心理学（Sport Psychology と Exercise Psychology）を「スポーツ心理学は人間のパフォーマンスへの心理学的プロセスの影響の研究と定義され、エクササイズ心理学はエクササイズ行動や他の身体活動様式を記述し、説明し、予測するために心理行動学的なプロセスを使用すること」と定義した。勉強、研究、臨床的な実践がそこには含まれている。

スポーツが人間の行動に欠かせないものとして広がっていくことは、将来においても揺るがないものであると考えられる。まず、「スポーツ（日本では体育も）」の意義をしっかり定着させることが何よりも重要だと思われる。人間に関わる重要な学問としてのスポーツ心理学は消滅することはないが、研究の蓄積を今日的視点でまとめなおすことが必要かもしれない。

過去の時代にはスポーツ心理学雑誌の論文を手に入れることも難しかったが、インターネットの時代になりLinkedIn、ResearchGate、Facebook、Twitterなどのウェブサイトが、専門家のネットワークを助けるように連動している。言葉の問題も翻訳ソフトの発達で容易になりつつあり、世界中のスポーツ心理学者はかなり簡単に交流することができるようになっている（Kornspan,A.S.＆A.Quartioli、2019）。

しかし日本のスポーツ心理学の研究者を見ると、近年外国に出て行くことが減っているような気がする。また、大学院は増えたが、狭い視点での研究にしか関心がないのは残念なことである。外国からすべてを学ばなければならなかった先人たちの努力に比べれば、簡単に多くの研究に触れられるのは大変好ましい状況である。しかし、研究者間の交流により研究の世界が広がり、競争による研究の促進も重要である。狭い世界に閉じこもってガラパゴス化してはいけないと考えられる（体育系の大学で大学院を持たない大学となった本学のガラパゴス化もすでに進行しているかもしれないのは、本稿とは別に心配である）。

12.まとめにかえて

今回、歴史をまとめたことにより、松井三雄と本学のかかわり、筆者の恩師（松田岩男）とのかかわりなどが理解でき、浅学を深く反省した。少なくともスポーツ心理学の研究者を名乗るには、まず歴史を知ることが必要であった。遅ればせながら、他の研究者

へ以下の3点を提言したい。

① スポーツ心理学の歴史の教育
スポーツ心理学を学ぶ研究者は体育・スポーツ心理学の歴史を知るべきで、教科書に歴史がまとめられていないので、歴史を載せる必要があると考えられる。

② 体育心理学とスポーツ心理学の統合
意味としては、スポーツが体育を内包すると考えたほうが良いので、スポーツ心理学に統合すべきである。

③ 体育・スポーツ科学の創設領域としての責任
体育研究所の最初の調査領域として「心理学」があり、日本体育学会の最初の専門分科会にも「体育心理学」がある。これは1900年代初頭にスポーツの国際的な組織化を考えたクーベルタン男爵の主導したスポーツ国際会議で生理学と心理学の会議が開催されたことにも関連しているだろう。このようにスポーツ心理学の重要性を十分に認識して「スポーツ」する人間に有益となる研究をする必要がある。内にこもらず他領域との連携、サポートなどなども重要な視点であろう。

今回十分に触れなかったが、メンタルトレーニングの研究はスポーツ心理学がスポーツ界に貢献できる重要な成果である。資格認定は大きな関心を得ており、他領域からの資格取得者も増えている。資格認定の責任と一定水準を保つための定期的な研修は重要な責務となるだろう。実験室研究の時代から見ると、スポーツの現場と直接に触れるという全く異なる研究スタイルが必要になる。基礎的な研究を心理的サポートに応用する視点もますます必要となるだろう。

また、メンタルトレーニング指導士が仕事として成り立つような研究環境やスポーツ環境をどのように整備するかも次世代の課題となっていくだろう。

追記

査読終了後に、「スポーツの心理」（松井ほか、1932）を見つけたので、写真5に示した。内容はスポーツの反応時間や記録の測定についてまとめている。スポーツ心理学という体系的なものではないが、スポーツ心理学の先駆けとなる考え方は認められるだろう。

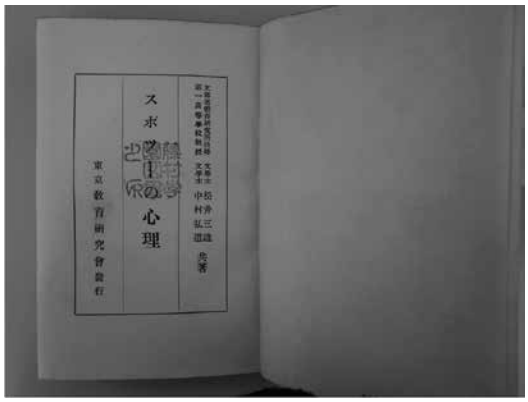

写真5．スポーツの心理（松井三雄・中村弘道、1932）

文献

Anshel、M.H.et al. (2019) APA handbook of Sport and Exercise Psychology, American Psychological Association, Washington, D.C.

Bäumler,G.(2009) The dawn of sport psychology in Europe,1880-1930.In C.D.Green & L.T Benjamin,Jr.(Eds.)Pshchology gets in the game:Sport ,mind and behavior,1880-1960, Lincoln,NE:University of Nebraska Press, pp.20-77

Elbe, Anne-Marie & Roland Seiler (Eds.) (2019) 50 years of FEPSAC. Recent developments in European Sport Psychology, FEPSAC Monograph Series #3.

Feige,K.(Ed.)(1977) The development of sport psychology:A synopsis of its research, application and organization in different countries. Kiel, Germant:Arbeitsgemeinshaft für Sportpsycologie in der Bundesrepublik Deutschland.

藤村学園創立百周年記念誌記録等作成実行委員会編（2002）藤村学園100年のあゆみ、学校法人藤

村学園（非売品）、p.306.
藤田厚（2003）日本スポーツ心理学会30年のあゆみ―これまでとこれから―、スポーツ心理学研究30－2：55-62.
藤田厚（2006）体育人と身体観　12松井三雄、体育の科学56-8：643-647.
Gould,D. & S.Pick(1995)Sport psychology :The Griffith era,1920-1940. The Sport Pshochologist,9:391-405.
Gould,D. & D.K.Voelker(2014)History of sport psychology. In Eklund, R. & G. Tenenbaum (Eds.) Encyclopedia of sport and exercise psychology, Thousand Oaks, CA: Sage, pp.346-351.
Griffith, C.R. (1926) Psychology of coaching, New York: Scribners.
Griffith, C.R. (1928)Psychology and athletics, New York: Scribners.
Kornspan,A.S.(2009)Fundamentals of sport and exercise psychology. ,Champaign, IL : Human Kinetics.
Kornspan,A.S.(2012)History of sort and exercise psychology.In S.M.Murphy(Ed.) The Oxford handbook pf sport and performance psychology pp.3-23,New York,NY:Oxford University Press.
Kornspan,A.S.＆A.Quartioli(2019）Chap.1 A brief global history of sport psychology. In Anshel. M.H.et al. (2019) APA handbook of Sport and Exercise Psychology volume 1, American Psychological Association, Washington, D.C., pp.3-16.
Kunath, P. (2003) Psychology and sport: a historical review, In Aptiszch, E.& G. Schilling (Eds.) Sport psychology in Europe. FEPSAC ―An organizational platform and scientific meeting point, FEPSAC Monograph No.2,pp.20-26,Biel, Switzerland: European Federation of Sport Psychology.
松田岩男（1974）スポーツ心理学の動向、スポーツ心理学研究1：2-3.
松井三雄（1930）體育心理学、東京:目黒書店,Pp.268.
松井三雄・中村弘道（1932）スポーツの心理、教育研究會、Pp.194.
松井三雄（1952）体育心理学、東京：杏林書院　体育の科学社、Pp.248.
松井三雄（1959）スポーツ心理学、同文書院　Pp.282.
松井三雄（1962）体育心理学（増訂版）、東京：杏林書院　体育の科学社、Pp.293.
茗体会百周年記念編集委員会（2015a）東京教育大学体育学部の歩み、茗体会、p.8. 原典は　体育研究所概要（1926）.
茗体会百周年記念編集委員会（2015b）東京教育大学体育学部の歩み、茗体会　p.282.
Morris,T., D.Hackfort, & R. Lidor (2003) From Pope to hope: The first twenty years of ISSP. International J. of Sport and Exercise Psychology,1:119-138.
中野浩一（2016）身体教育研究序説、不昧堂出版、Pp.213.
日本スポーツ心理学会（2013）日本スポーツ心理学会40年記念誌、非売品.
日本スポーツ心理学会編（2008）スポーツ心理学事典、大修館書店、
Radionov,A.V.& M.V.Valyuzhenich(2012)English title:History of sport psychology:The first half-century. Спортивный психолог,3-27:28-30.
Ryba,T.V. & Stambulova,N.B.(2016)International histories and contemporary perspective : Russia. In Schinke,R.J., K.R.McGannon, & B.Smith (Eds.) Routledge international handbook of sport psychology, New York, NY: Routledge, pp.9-19.
Salmela,J.H.(1981) The world sport psychology sourcebook, Ithaca,NY:Mourvement Publications.
Salmela,J.H.(1992) The world sport psychology sourcebook(2nd ed.),Champaign, IL : Human Kinetics.
Simon, J.P. & M. B. Anderson (1995) The

development of consulting practice in applied sport psychology: Some personal perspectives, The Sport Psychologist, 9:449-468.

Vealey,R.(2006)Smocks and jocks outside the box:The paradigmatic evolution of sport and exercise psychology. Quest,58:128-59.

謝辞

本学図書館事務室長であった神月博さん（2019年5月に不慮の事故により逝去）には、本稿で取り上げた松井三雄先生のことを話したとたんに、本学図書館の地下にある寄贈図書のリストを作成頂き、関連する資料のコピーまで頂きました。本学図書館の生き字引であった神月さんのことをここに記して感謝申し上げます。